
トリップ・ライター

むむむぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリップ・ライター

【Nコード】

N7471Q

【作者名】

むむむぎ

【あらすじ】

本を読むことが好きな青年が、神様に力をもらい、頼まれた探し物を探しながら様々な世界を旅して、その世界の出来事を本にしていく話

主人公は傍観者でありたいと願っているので基本的に物語に介入しません。暇でした読んでみてください。

プロローグ（前書き）

痴女作です。こういう設定で書きたいなって、思った時に書いていくので投稿が不定期ですがよろしくお願いします。

プロローグ

本が閉じられた、その本の題名は『 皮の表紙に装飾や模様が施された分厚い本だ、その本を手を持ち一人の男がこう呟いた
「ここに物語は完結した」

男は20歳ぐらいの青年で、群青の髪と眼を持ち、黒いロングコートに同じく黒いシルクハットを被っている。

「今回の物語はハッピーエンドでしたか。」

ふふふと微笑を浮かべ青年は手に持つ本を倉庫の中にしまった。

「さて、次は一体どんな物語になるのでしょうかね。」

そう、青年は言うて空気に溶けるようにして姿を消した。

その青年の名は 牧宗吾という。

~~~~~

春も過ぎ夏になり梅雨の時期に入ろうかという時、

町の図書館では本のページをめくる音だけが聞こえていた。

その中に机に3、4冊ほどの本を重ねて、脇に置き、熱心に本を読む青年がいた。その青年の名は、牧宗吾 本が好きな20歳である。

「・・・」ぺら

「・・・」ぺら

「……………」ぺら  
パタン

「ふう、さてと、そろそろ帰りましょうか。」  
かれこれ5時間は、座って本を読んでいた青年は時計を見てそう言った。

青年は読んでいた本を、もとあった棚に戻して馴染みの司書に挨拶をして、入り口へと向かっていった。

先ほど読んでいた本の内容は、勇者だったり、お姫様だったり、ドラゴンだとか、魔法などがある世界を舞台としていて、ドラゴンに攫われたお姫様を、勇者が助けに行くという、王道ファンタジーである。

「ただいま」

自分一人しかない家の鍵を開けて入り、夕食を食べて、風呂に入り、ベッドに寝転がる。

そういえば、読みかけの本がありましたね

青年はおもむろにベッドの脇に置いてあった読みかけの本を手に取り読み始めた。

読んでいるのは、図書館で読んでいたのとは、ちがうファンタジー物である。それだけでなく家の本棚にはびっしりと同じくファンタジー物の小説が詰まっている。

この青年は大のファンタジー小説好きなようだ。

「……」パタン                      そろそろ、寝ますかね

日付が変わる時間に青年は本を読むのをやめ、電気を消して目を閉

じた。

青年が寝付いたところ唐突に、ベッドの周りが光、光が治まると青年の姿は、ベッドから忽然と消えていた……。

## プロローグ（後書き）

次もプロローグです。

## プロローグ2

宗吾は今困っていた。なぜ困っているかというと、自分置かれている状況が理解できないのである。

ひとつだけわかっていていることは、ここは自分の部屋ではないこと、まあ、これはだれだって気づくだろう、なぜなら宗吾の目の前には何も無いのだ、四方八方360度、見渡してもあるのは白い空間のみだから。

「一体どうなっているのでしょうか。・・・確かに家に帰って、寝る前に読みかけだった本を読んで、日付が変わるころには寝たはずです。まさか創作小説にあるみたいに神様とかが出て「起きたか。」！来ちゃったかも。」

宗吾が別段慌てもせずに考えていると突然声が聞こえてきた。声が聞こえる方に振り向いて声の主を見た。

一言で表せば白い玉である。それが宗吾の胸あたりの高さに浮いていた。

「・・・・・・・・」  
慌てても仕方が無い、今は情報がほしい。

気づかれないように沈黙し内心でどうすればいいか考えていると、白い玉が声を発した。

「我は人間にとって神様と呼ばれている。お主は突然こんなところにいることに困惑しているだろう、情報がほしいのだろう、何か質問があるのなら答えよう。」



「（思考が読まれている！なら、もう正直にいきましょうか）なら、ここはどこですか？」

「ここは狭間だ、黄泉と現の狭間」

「（黄泉と現・・・ってことは）俺は死んだのですか？」

「ちがう。お主は現にあった体ごとここに来ている。」

「では、俺をここに呼んだ目的は何ですか？」

「お主には私の代わりにやってもらいたいことがある、故にここに呼んだのだ。」

「それはなんですか？」

「お主にはある探し物をしてもらいたい。」

「なら、何故私のですか？ほかにたくさん人はいますよ。」

「お主はおそらく断らないと思ったのだ。探し物といってもどこにあるのかわからない、故に様々な世界に行ってもらい探してもらうことになる。お主は叶わぬと思ってた夢があるだろう、探し物を探してくれるのならその夢の手助けをしよう。」

「！！」

宗吾にはある夢があったそれは『自らの目で見た物語を本にした。』というものの、

夢に見つつも非現実的であったので諦めていた夢だった。

「私にデメリットは無いんですか？」

「ない、我は探し物さえ見つけてくれればよい、我に寿命はない、よって期限もない、それに探し物が見つかった後はお前の自由にするがいい。」

「わかりました。その話、お受けします。」

「感謝する。ではこれよりお主に力を与える。我が探し物がそう簡単に見つかるとは

思わんから、まずは<不老不死>にしよう、そして様々な世界を渡る、

<世界渡りの能力>後は可能な限りお主の希望どおりにしよう。」

「では・・・

ゲイト・オブ・バビロン

王の財宝

（中身は白紙の本や完結した本など）

認識拒絶

（発動すれば誰にも認識されなくなる。誤って攻撃がきても体をすり抜ける、

敵意がある物がさわるor攻撃しても無意識に発動する）

魔法

（浮遊、属性魔法<火風水土etc>日常に使える程度（薪に火をつけるなど）

主人公適正&amp;p・世界探索

（その世界の主人公となり得る生命を見つけることができる&amp;p・その世界の情勢を知ることができる）

をください。」

「問題ない、だがこれでいいのか？ 魔力と力最強とか、時を止めるとか、美形にしてほしいとは頼まないのか？」

「俺はその世界で紡がれる物語に関わりたいわけではない、その世界の流れを本にしたいだけです、強大な敵を倒すわけでもない。」

そう、彼は、自らが物語の本筋に関わることを認めない、紡がれる物語を鑑賞し傍観し、物語の完結にいたるまでの全てを、あるがままに受け止める、傍観者であることを望む。

「そうか。では力を与えよう。」

神様がそう言うのと、目の前に淡い色の光が現れて宗吾の中に入っていた

「これでお主は先ほど言った力が使えるようになっていく。そして肝心の探し物だが、

それは私の『 だ。よろしく頼む。』

「わかりました。」

この時より、

何百何千何万それこそ無限大にある世界のいくつかに現れ本を書くものが現れる

その物は自らをこう呼ぶ、

トリップ・ライター

## プロローグ2（後書き）

最初に行くのはコードギアスの世界です。

## 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

サブ主人公登場、コードギアスの世界では主人公ですが。

## 一 二 三 目 的 序 章

木々が生い茂る森、誰の目にも付かない森の中で、空間が歪みその者が現れた。

S i d e ・ 宗 吾

「ここが、異世界。」

さて、記念すべき最初の世界に降り立ったわけですが、んゝ中々、空間移動は不思議な感覚でしたね、仕込まれる感覚というか、包まれる感覚というか、どうにも口では言い表せないですね。

周りを見渡しても、全部森ですか、こちらとしては好都合ですね。さてと、さっそく能力を使ってみましょうか。

ふむ、コードギアスの世界ですか。

では主人公はっと、

「主人公適正探索、発動。」

数は4人、名前は・・・ルルーシュ・ヴィ・ヴリタニア、ナナリー・ヴィ・ブリタニア、

枢木スザク、そして、かんざきがくや神崎楽也

なるほど、それでは行きましょうか。

「さあ、どんな物語になるでしょうかね。」  
その顔には、楽々は微笑があった。

S i d e・宗吾E N D

S i d e・神崎楽也

ふう、やっと終わった。

やはり農作業の手伝いは疲れるな。

「おい、お兄ちゃん」「……………」

「なんだー」

今俺を読んだのは俺の妹の楽奈【ラクナ】と弟の楽太【ガクタ】だ、妹は黒髪短髪で活発な子、弟は俺と同じ坊主頭でいつもヒーローの人形を持っている内気な子だ、

だが俺は10歳過ぎたら、髪を伸ばすつもりだ。

ちなみに家族構成は妹と弟が一人ずつと両親と婆ちゃんがいる。そして、家は農家で米も作っている。

「お父さんが呼んでるよー」

「わかった。裏にいるのか？」

「うん！早く行こ！」「行こつ……………」

妹と弟は笑いながらそう言つと、おもむろに俺の両手を掴んで引つ張っていく。

「おいおい！ そんな引つ張るなよー！」

二人は俺にとって、大事な大事な、かわいい兄弟・妹だ。目に入れ



ても痛くない、弟の恋愛については弟の意思を尊重しよう、だが！  
妹の相手には、

俺を倒してからにしろ！と言ってやる、絶対！に！そこ！シス  
コンとか言っな！！！！

そうこうしている内に家の裏に付いた。

「来たか、楽也」

「何のよう？」

親父は何年も農家をやっているからガッチリとした体格でこれまた  
坊主頭である。

「楽也、任せた仕事は終わったか？」

「うん、終わった。」

「そうか。ならそこにある野菜の種を袋に入れて家に持って返って  
くれ、それで仕事は終わりだ、あとは自由に過ごしていいぞ。」

「わかった！帰ろうぜ楽奈！楽太！」

俺は妹と弟に笑いかけ言った。

「うん！」 「うん……」

二人も笑って来たときと同じように俺と手を繋いで家に向かう。

俺がテンプレで転生してもう8年、  
今が2008年8月10日、原作開始まであと2年ぐらいだな。

サクラダイトを手に入れにブリタニアが宣戦布告（といっても皇帝  
にとっては神根島が目的だろうが）してくるまで、あと2年か・・・  
。

戦争になっても、家族だけは守らなきゃな。

S i d e・楽也E N

## 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

次に登場人物紹介して、その次に原作キャラが登場します。

## コードギアスの世界―登場人物（前書き）

最初の世界はコードギアス、好きな作品の一つです。

## コードギアスの世界―登場人物

名前：神崎<sup>がくや</sup>楽也

姿： 子供のころは坊主頭、途中からぼさぼさ頭、黒髪

能力：ギアス

（高速移動〓自分と自分に触れているものが高速で移動できる、

デメリットなしON・OFF切り替え可能、暴走なし）

ナイトメア

（見た目SEEDのガイアガンダム、ポテンシャル：紅蓮聖天八極式の2倍、

ランドスピナー、エナジーウイング、スーパーヴァリス、FF7のクラウドの

合体剣<3本の長剣、2本の短剣、ファースト剣>×2で

超究武神霸斬 ver.5

可能、フレイヤ〓自動生成可能、ガンダムSEEDのミラージュコロイド、

エナジー量：無限、普段は自分の中にあり念じれば出てくる、

自分が降りたときは勝手に消える）

操縦の才能

（乗り物なら何でも最大限に乗りこなせる。応用力もある）

ギアス無効能力

参考：超究武神霸斬 ver.5は使える

\_\_\_\_\_

[illegible]

\_\_\_\_\_

[illegible][illegible][illegible]

## コードギアスの世界―登場人物（後書き）

オリキャラは彼らしか出しません。

## 幼馴染（前書き）

原作キャラ登場の回です。



## 幼馴染

.....皇暦2008年、秋.....

side・楽也

蒸し暑い夏が過ぎて、実りの秋になった。

俺の家にとって、大事な稲刈りの時期だ。家の稲刈りは、家族総出で毎年行っている。

で、今俺が何をしているかというと、田んぼの角の稲を鎌で刈っている、これをしないとコンバインが田んぼに入った時に、稲を潰してしまう。

てゆうか、やってくれと言われてやっているが、8歳児に鎌を持たせるか、普通

まあ、近くにいるし婆ちゃんがいるし、こっちの方を時々みるから、気にしてくれているとは思うが。

まあ、いいか。ちなみに楽奈と楽太は、任せられる仕事が無いので母親監視の下、無邪気に走り回っている。父さんは、コンバインに乗って、稲刈りしている。

俺の貰った能力に、乗り物は何でも乗りこなせる能力があるけど、さすがに、そのことを言うわけには行かないし、乗せてくれるはずが無い。

そんなこんなで、稲を刈っていると、

「おーい！ 樂也。。」  
と聞き覚えがある声がした。

「なんだ、スザクか、手伝いにも着てくれたのか？」  
そう、声を掛けてきたのは、コードギアスの主人公ルルーシュの親友であり、敵でもある  
枢木スザクその人である。

「そうだが、今日は樂屋の家って稲刈りじゃん。家の中いても暇だから、こっちに来た。」

「そうか、なら父さんのところに言って、何やればいいか聞いて来いよ。」

「おう！」

何故、スザクと親しいのかだが。家のお得意先が、枢木家だったりする。

親同士が知り合いで、前に枢木家に作物を届けに行った時に知り合った。

今では親友と言える位の間柄だ。

太陽が真上に差し掛かったぐらいで、母さんの呼ぶ声が聞こえた、  
どうやら飯らしいな。  
「行こうぜ、スザク！」

「おう！」

言ってみると、楽奈と楽太が昼飯の準備をしていた。ブルーシートの上に並べられた皿の上には、大量のおにぎり。

おにぎりっていいよな、ちなみに、俺は具なしで、塩だけで握ったやつが好きだ。

「スザクさん！」

楽奈が、一緒に来たスザクを見て、うれしそうに声を張り上げる。

「おつす、里奈、それに楽也も」

「こんにちは……」

俺とも親しいスザクは、当たり前前に俺の家族とも親しい。

よく家に来るので、飯と一緒に食べることもよくある。

そして、俺とスザクが一緒に召しを食べる時、俺達にとっての戦争が始まる！

「……いただきます……」

「これもらい！」

「ため！スザクそれは俺のだ……」

「早い者勝ちだ！」

「畜生、なら俺はこれ貰うぜ！」

「！！それは俺が食おうと思つてたおにぎりだ、返せ！」  
「早い者勝ちなんだよな〜」

これが俺とスザクの『戦争』、言い換えれば、『食い意地張ったバカどもの食い物争奪戦』である。

だが、この二人、スザクは、自分と楽也の前から、楽也は、スザクと自分の前にある

おにぎりしか手を出していないあたり、根っこは優しい奴等である。  
そしてこの戦争？毎度毎度いつも同じ終わり方をする。

「二人とも喧嘩しちゃだめー！ー！ー！ー！ー！」

「！！！！！！」

飯も食べ終わり、午後の作業は午前中にやった、角を刈った田んぼの稲をコンバインで刈るだけだからやるのが無いので、俺達は山で遊ぶことにした。

山は、今だ紅葉も始まらずに木が生い茂っていた。

そして俺達は様々なことをして遊んだ。木登り、虫取り、木の実探し、鬼ごっこ、かくれんぼ、山の池での水切り、e t c .

・最近、肉体年齢に引つ張られているのか、子供みたいに（体は子供だが）無邪気

遊ぶようになっていた。まあ、それがどうこう言つことではないけど遊んでいる途中にもいろいろあった。

楽太が木登りで上りきれずに落ちたり、楽奈が、虫が苦手なのを知

つていて近づけてくるスザクを俺が蹴り倒し、その後喧嘩になったり、俺が、足を滑らせて池に落ちたり、楽太が、かくれんぼで俺を見つけられずに泣き、慌てて出て行ったら「見つけた!」と元気に言われたり、楽太の嘘鳴きに乗ってしまつて「やられた・・・」つと、落ち込んでいる俺をスザクが爆笑してしたり、その俺を楽太が慰めてくれたりとか。

空が綺麗なアカネ色になり、空の色であたり一面が赤みがかつた道を、俺とスザクはそれぞれ、楽太と楽太を背負って歩いていった。俺もスザクも、道場で鍛えてもらっているから、そんなに苦でもない。

「今日も遊んだな」

「服も泥だらけだしな、」

「お前の家は、そこんとこ、気にしないだろうが、家は家政婦のおばさんが煩くて、たまつたもんじゃねーよ」

「じゃあ、もつと大人しく遊ぶか?」

「冗談! 大人しくなんて俺の性に合わない!」

「・・・そうだな! (やつぱりアニメとは全然違うよな、それだけ変わる要因があつたんだろうけど・・・)」

それから、家に着くまで、他愛も無い話を俺達はしていた。

家に着くと、母さんが俺達の姿をみて、呆れたように、でも穏やかに

に微笑み

風呂に入ってきたさい、つと言った。

スザクも、時々一緒に入るのだが、今日はこのまま帰ると言った。家政婦のおばさんに見つからないように、こっそり帰ると言っているが、未だに帰りきたということはないらしい

俺は楽奈と楽也を起こして一緒に風呂に入った、

あれだけ遊んだのにまだ元気が有り余っているように、はしゃぐ二人を見て俺は言った。

「楽奈、楽太、今日楽しかったか？」

「うん！」「うん」

「そうか！」

楽奈と楽太の言葉を聞いて、自然と頬が緩む。  
やっぱり家族っていいいなー

「なあ？二人とも」

「何？」「？」「…」

「もし、この国が攻め込まれて、今の生活を捨てなきゃだめになったら、どうする？」

「お兄ちゃんが何言ってるのか、わからないよ」「うん…」.

「もし、俺たち家族の所に、こわーい人達が着て、ひどいことを、しようしたらどうする？」

「お巡りさんに助けてもらおう!」「僕もそう思う…」

二人の言葉に少し啞然としたが、すぐに取り繕って言った。

「そうか!なら助けてもらえるように、いい子にしてなきゃな!」

「うん!」「うん…」

妹と弟は無邪気に笑っていた。

みんなが寝静まってから、自分のベッドの中で、樂也はひとり考えていた。

あと一年もすれば、ルルーシュ達がやってくるはずだ、そうしたら、もう時間が無い。

ブリタニアの日本侵攻は、止められる確立が少ない。可能性として、ギアス卿団と神根島の破壊、あるいは皇帝とV・V・暗殺、だがどちらか俺には無理だ、

ギアスを使えば一晩で戻ってくることも可能だが、俺のギアスは高速移動、

可能な限り速くしても、レーダーには引つかかる。ミラーージュコロイドがあるが、

あれじゃあ高速で移動できないから、一晩で戻って来れない。

たとえ、それができたとしても、日本にはサクラダイトがある。ブリタニアが攻め込む理由はそれだけで足りる。

となると、後の残された道は戦争中、戦後の日本で生き残ることだ。ブリタニアがせめて来た時にどう生き残るか。

家は捨てるしかないか、ここは自然が多くて町ともそれなりに離れてはいるが、近くに富士山があり、そこにはサクラダイト採掘所がある。戦争になれば、真っ先に狙われるような場所だ。アニメだと第一話で、その描写が合ったから、その近所のここも危険だ。

どうすればいい？・・・どうすれば家族を守る？・・・

そういえば、転生した直後はどうやって原作に介入しようかとか、原作崩壊してやるって意気込んでたな。

俺にとって、コードギアスは綺麗な終わり方をしたと思う、けど、納得するかは別問題だ。

ルルーシュが死ぬことは納得したくない。コード継承していて欲しいと思う、

それ以前に黒の騎士団の裏切りがなければ、ルルーシュがゼロレクイエムで死ぬことも無かったと思う。

ルルーシュがギアスとブリタニアの皇子ってことを黒の騎士団員に黙っていたとはいえあんなに簡単に捨てるのはひどいだろう。

確かにジェレミア卿が加わったり、ギアス卿団の人間を殲滅したりナナリー優先して騎士団を危険な目にしたけど、ゼロだって中身は



人間だ、それに敵であるシュナイゼルの言葉を信じてゼロを裏切るとか無いだろ。

敵からの情報なんて、敵側に都合がいいように編集してるはずだ。まあ、シュナイゼルだけじゃなくて、扇もヴィレッタの言葉を信じて裏切ることに賛成してたのもあるだろうけどな。

ゼロが進む道の途中には日本開放もあって、それを成すだけの力量を持ち、成果も上げているのに、それにもかかわらず自分達のリーダーを捨てた。

俺は黒の騎士団が嫌いだ。だからルルーシュが裏切られないためにルルーシュが死なないために原作に介入しようと思ってた。

それなのに、その気持ちや、年々、家族と触れ合って、家族をどう守っていくかに変わっていった・・・。

孤児院の仲間達が家族ではないとは言わないが、生前で友達が血の繋がった家族は

大切だって言っただ意味が、わかった気がする

楽也の生前は、所謂、天涯孤独というやつである。孤児院で育ち、一人身のまま、事故によって死んでしまった。楽屋にとって孤児院の養父や仲間が家族ではないとは言わないが、今の家族は、血の繋がった真正銘の家族であり、家族に飢えていた楽也にとって今の家族が、大切になるのは、しかたがないことであるのかもしれない。

「とにかく、やれることをやっていくか！」

て言っても俺8歳だからな。やれることは限られてくる。  
「ううゝん」

「！」（起こしちゃったか。）

「みん・・な、ずっと・・・・・一緒・・だよ・・・ふみゆゝ・・・  
・」「う・ん・…」

「ははっ」（寝言か、）

樂也は、樂奈の頭と、樂太の背中を撫でる

今も俺には、ルルーシュを助けたいと言う思いはある、  
だが家族を守りたいと思っている自分もいる。

これからどうなるのかはわからない。もしかしたらルルーシュが日本に来ないかもしれないし、戦争も起きないかもしれない。

将来の俺にとって、ルルーシュの命か、家族と一緒に居ることのどちらが大切になっているのかもわからない。けど今この時は、家族のためにこう言おう。

「ああ、」

ずっと一緒さ・・・

## 幼馴染（後書き）

スザク登場、最初は主人公交えた子供時代を書いていこうかと思ひます。性格違ひかも知れませんが、よろしく願ひします。

## 人質の皇族（前書き）

原作二人目のキャラと遭遇します。

## 人質の皇族

.....2010年、初夏.....

side・楽也

俺はこの一年半、家族と過ごし、スザクと楽奈と楽太と一緒に遊ぶ日常を送っている。そんな時に、稀に見る不機嫌さを隠さずにこっちに来るスザクを見た。

「どうしたの？スザク、見るからに不機嫌そうだけど」

スザクが不機嫌になるのはよくあることだ、それでいつも俺が相手をして

、口喧嘩に発展しお互いがお互いを罵り合って、喧嘩する。そして、

しばらくすると里奈が来て止められることがいつもの流れ。

不思議なのは、里奈が近くに居ないときに喧嘩しても、

どうやって知ったかは知らないが、いつもやってくることだ。

今回も同じだろうと思って構えていると、

「今度、家にブリタニアの皇子が来るんだってさ。」

俺は目を見開いた。ついに来るのか、ルルーシュが！。

「皇子！？名前は？」

「ルルーシュって奴とナナリーって奴、  
やっぱり、あの二人か・・・」

「それで？お前が怒ってる理由はそれだけじゃないだろ？」

スザクは、ブリタニアが嫌いなので、不機嫌になるのはわかるが、

ここまで不機嫌にはならない、理由としては、よほどむかつく奴なのか、

それとも自分に関係することが。

俺の予想が正しければ、俺達が遊ぶのに使っていた土蔵がルルーシュとナナリーの住む場所になるはず。おそらくそのことについても怒っているんだろう。

「俺達が遊んでた土蔵があるだろ、そこに住むことになったんだよ！！あゝもうなんでよりにもよって、あこなんだよ！！」

そこからはもうスザクの言葉は止まらなかった。結局、その後に口喧嘩になり、さらに発展して喧嘩になったが、いつもどおりやって来た楽奈に止められた。

その日から、数日後、予定道理、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアとナナリー・ヴィ・ブリタニアは日本にやってきた

ルルーシュ達が来た日の翌々日に俺は、スザクのところを、訪れた

「おっす、スザク・・・どうした？元気ないな。」

目に見えて落ち込んではいないが、幼馴染としては、スザクの気持ちの沈みようはわかった。

好きな女の子に振られた？　ちがうな、そんなの居ないことを俺は知っている。

楽奈にちよつかいだして、拒絶された？　それだったら覚悟しろよスザク！

ゲンブさんに怒られた？　これも違うな、それならスザクはこんなに落ち込まない。

となると、ルルーシュ達と何かあったんだろうな。

「実は・・・」

話を要約すると、目の見えないナナリーのためにルルーシュが古ぼけた土蔵のことを、立派な屋敷と言って、それにスザクが感情的になってナナリーの前で本当のことをばらした。その後、ルルーシュに殴りかかって、ナナリーに止められて目が見えないことを知り、ごめん、と言って蔵から飛び出した、と。

なるほど、スザクはナナリー罪悪感を感じてんのか。

「それで、お前はどうしたいんだ。」

「別に仲良くなりたいわけじゃない、だからこのままさ。」

「そうか、なら、その顔どうにかしろ。そんなんじゃない一緒に遊んで

ても楽しくないぞ。」

「・・・そーだな！やめやめ、こんなのは俺の性に合わん！」

「そうそう、それでこそスザクだ！じゃあ行こうぜ、里奈と楽太も待ってる！」

「おう！」

side・楽也END

.....数日後.....

side・スザク

物置倉の前に洗濯物がある。あいつらの物だ。そこはこの前まで、俺達四人の場所だったのに、里奈と楽太は残念そうにして、心なしか楽也もそうだった。

「どいてくれないか？」

その声に振り返ると、後ろには、あいつがいた、一週間前から家にいる、ブリタニアの皇子 ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが立っていた。

「ナナリーの分を干したいんだ、早くしないと日が陰ってしまう。ここ使ってはいけなかったかな？それとも、僕に何か用事とか？」



「あるわけないだろ、用なんて、俺は忙しいんだ！

~~~~~

バシン！！

「うわー！！」

「どうした！！ スザク君、集中が切れたぞ」

「すみません……。藤堂先生」

そうだった。俺は藤堂先生の所に稽古に来てるんだった。

「珍しいな、スザクが集中を切らすなんて」

俺と一緒に稽古に来てる楽也がそう言うてくる。

先生は軍隊の仕事を抜けて態々教えに来てくれてるんだから、しっかりやらないと。

剣術で見つとも無いまねは藤堂先生にも、楽也にも見せられない。

「今日はもう四回目だぞ、気になるのかブリタニアの皇子が？」

「別に！！あんな弱っちいの！」

素直じゃないな と笑いながら楽也が言うてくる、うるせー！

「もう喧嘩したのか、確か君と楽也君とは同じ年だったね、いい友

達になれるといいな」

「まさか！あんな恩知らず、あいつ、父さんが付けたお手伝いさん、全部断っちゃたんだ

食事だつてちゃんと作って作ってやってるのに、一口も手をつけなくて、」

「毒殺でも警戒しているのか？」

「父さんがそんな事するかよ！ブリキじゃあるまいし」

「いや、多分だけどあいつにとって、日本もブリタニアも同じなんじゃないか？」

「はあ！日本とブリキが同じ、何言っただよ！楽也」

「日本にしろ、ブリタニアにしろ、あいつは同じくらい信用できないだろ、ブリタニアには捨てる同然の扱いで日本に送られたって聞いたし、日本は敵国だしな」

「そうだな、スザク君、楽也君、私は軍人だができれば戦いたくないと思っている。」

「どうして、藤堂先生ならブリキどもに負けないでしょ！」

「戦わない方が楽だろう、意外と怠け者なんだよ、私は。さて今日の稽古はそろそろやめにしよう。二人とも汗を拭いて風邪を引かないようにな」

藤堂先生なんか変だな、父さんも最近東京に行きつ放しだし、どう

したんだろう？

帰り道に、俺は楽也に、自分の疑問を言ってみた。そしたら

「多分だけど、日本と他国との関係が緊迫してるんじゃないか？そうなれば、やらなきゃならないこともあるだろうし。」

って言った。そうだよな、父さんや藤堂先生も大変なんだよな。

ふと、気が付くと楽也が立ち止まっているのがわかった。その視線の先を見ると、

ルルーシュがいた。だけど、そこにはルルーシュ以外にも、町の子供達と、父さんが付けたSPもいた。

そこでルルーシュは町の子供に、殴られていた、けど反撃しないでただうずくまって耐えているだけだった。

弱いくせに町なんかを下りて来るからだ、でもなんで、SPは何もしないんだろう？

俺は抵抗しないルルーシュにも、弱いものいじめなんてしてる奴らにも腹が立ってきた。止めに行こうとした時

「スザク、俺はアイツ助けに行くけど、お前はどする？」

楽屋がそう言った。

「当然！皇子は嫌いだ、だけど弱いものいじめはもつと嫌いだ！」

「じゃあ行こうぜ！」

「やめろ！！」

その後、町の子供達は、俺が枢木家の子供だとわかると、すぐに逃げて言った。このあたりで枢木の名前は絶対だ。

「お前達、なんで助けなかった？ボディーガードだろ」

S Pに問いかけたけどS Pは何も言わない。

「おそらく違うぞ、スザク」

楽也そう言った、けど違うってどうゆうことだ？

「監視だと思うぞ、そうだろ、えゝとなんて呼べば言い？」

そう言つてルルーシュに答えを求める

「好きによべばいい。それと、君の言ってることは正しいよ、彼らは僕が勝手に逃げたり、死なないよ うにするただの見張りなんだ。」

「そんな！」

「君らはどうして助けたんだ、僕はブリタニア人なのに、」

「ブリタニアは嫌いだ！けど弱いものいじめはもっと嫌いなんだ！！！」

楽也も頷く。

「弱いもの、か、ふつ、そうだな」

「何がおかしい」

「別に」

「嘘だ今笑っただろう！」

「自分のことだよ笑ったのは。自嘲ってやつ」

「自嘲？」

「負け犬の笑いだよ、そうやって心を守ってる、どいてくれないか？君は僕のポイントカードを踏んでる」

そういつて、ルルーシュは、足跡が付いたポイントカードを大事そうに抱えて、

あたりに散らばった小銭を拾っている。

途中、楽也が手伝うよって言ったけど、ルルーシュは断った、

ルルーシュがポイントカードを持ち小銭を拾う姿は最低にかっこ悪くて、いじましかった。俺はそこで衝動に任せて言った。

「弱っちいくせに町に下りるからだ、意地を張らないで、家の食事を食べよ！毒なんか入れてないぞ！」

「知ってる」

「なら食べよ！」

「僕は生きるんだ、自分の力で生きる、死人にはならない僕もナナリーも」

それだけ言つとルルーシュは片足を引きずりながら歩き始めた

生きる？当たり前だろ、生きてるから、生きてるんだろっ、何言つてんだあいつ

「なんか、トラウマみたいなことでもあるのかな？」

楽也の言葉も耳に入らず、なぜか俺は自分が無性に恥ずかしかった。

S i d e : ス ザ ク E N D

人質の皇族（後書き）

ルルーシュ登場の回

作者は一応、全部ではないですがピクチャードラマは、見えます。
主人公の知識はアニメを見た程度です。

それではこれで。

新たな友達

side・楽也

最近スザクからルルーシュの話をよく聞く、口では興味ないと言っておきながら、ルルーシュの話をよくするあたり、無意識に気になっているんだろう。これを言ったら怒ることは目に見えているから言わないけどね。

ルルーシュ達が日本に来て半月経った今日、俺は、収穫した野菜を届けに枢木家に来ている。

父さんは野菜を届けて、ゲンブさんと一時間ほど話をした後、俺に遅くならないように言って帰っていった。

俺はいつもどうリスザクと遊んでたが、蔵の前に来るとスザクが立ち止まって、蔵を見上げた。

何か深く考えているみたいだな。

なら待つか、大方ルルーシュのことだろうと思い。静かに待っていると、

後ろに近づいてくる気配を感じた。車輪の音が聞こえてるからナナリーだろう。

……話してみたいし、声を掛けてみるか。

「こんにちは」

「!」「!」

ナナリーだけでなく、スザクまでも驚いたらしい、てかドンだけ考えることに没頭してんだよ。

「・・・だれですか？」

ナナリーにはやっぱり警戒されている、まあ当たり前か

「俺の名前は、神崎楽也っていうんだ、それで俺の隣にいる奴は枢木スザクだよ

「スザク・・・あ！殴るのですか私を？抵抗はしません。でも覚えていて下さい、私の心までは殴れないと言うことを。」

「君は「何をしている！！」・・・ルルーシュ」

「大丈夫かナナリー、こいつらに何かされたのか？」

「ちがう！俺達は」

「僕の留守を狙うだなんて日本人らしいな」

「なんだと！強盗のブリキ野郎が！」

「強盗？父親にそう言われたのか？」

「ちがうのか！」

「いや違わない。ブリタニアはそういう国だ、軍事力を背景にした侵略行為、威圧外交、戦利主義、まったく最低の国だよ」

「お前・・・」

「言っておくが日本だって違いは無い、中華連邦とブリタニアの睨み合いを利用して金稼ぎ、サクラダイトの採掘源を利用した二重外交、貧困地域の経済支配、中々ずる賢い国だよ日本は」

「ふざけるな！日本はそんな国じゃない！」

スザクは腕を振り上げた、

「殴るのか？同じだなブリタニアのやり口と」

「うるさい」

スザクはそのまま、腕を振り下ろ

さ

なかった。いや性格にはできなかった。スザクの振り下ろされようとした手は、樂也によって止められていた。

「落ち着けスザク！まずはその腕を引っ込めろ、ブリタニアと一緒になんて言われたくないだろ」

そういうとスザクは腕を引いてくれたが、言われたことが悔しいのか、スザクは、走り去ってしまった。俺はとりあえず誤解を解く努力をしようかな。

「えーと、まずは誤解を解いておこう思う」

そういうとルルーシュは俺を睨んできた

「誤解だって？」

「そう誤解、まず俺達は別に君の妹を傷つけようとしてここに来たわけじゃないよ」

「それを信じると？」

「そこは信じて貰うしかないかな、俺もスザクも、弱いものいじめは嫌いだって、この前町で言ったじゃないか、」

「・・・」

これはまだ疑ってるな。

これ以上はいても仕方ない。しスザクを追うか。

「それじゃあ、おれはスザクの後、追うから、じゃあな！」
さて、スザクはどこにいったんだろうか？

日が傾いた、一体どこにいるんだ？スザクの奴、最初に枢木神社を回ってその後に回りを探したがスザクの姿はどこにもいなかった。
いったいどこに・・・もう一度枢木神社をみていなかったら帰ろう。

枢木神社に着くとなにやら、スザクが走り回っていた、探したぞつと言おうと思ったら、

なにやら必死に探していたので、どうしたんだ？って聞いてみた。
そしたら、

ナナリーとルルーシュがいらないらしい。

一緒に探しながら事情聞くと、俺は出会ってから初めてゲンブさんに怒りを覚えた、

確かに政略結婚は為政者にとっては大切なことだろうが、一人の兄としてそれは許せることじゃない。

俺は必死になって探した、そして見つけた枢木神社に続く長い階段の途中にある大破した車椅子を。

俺は驚かずには居られなかった、彼女が危険な目に合っている、

おそらくルルーシュは俺達異常に必死になって探しているだろう、

もしくは一緒に逃げているかだが。

もし里奈が40以上歳が離れたおっさんと結婚することになったら、俺はきつと耐えられない。

里奈には自由に恋愛してほしい（だが、その恋愛の先には俺と言う壁があるがな！！！！）と思う。

俺がそう考えていると、脇の茂みから声が出た。

「ナナリー！ナナリーなのか！？」

茂みから出てきたルルーシュの顔には涙の後があった。おいちよつとまで、ルルーシュがナナリーと一緒にじゃないってことは！

「ルルーシュいなくなったのか？あの子が」

スザクが問う、だがルルーシュは目を伏せていた。

「関係ない君達には」

「居なくなっ たんだな」

「だったら、どうだって言うんだ」

「それは、一緒に探して「手伝ってほしくない！日本人には、君だ
ってブリタニアが嫌いだろう、声は俺達兄弟の問題だ」」

俺はその発言を聞いたとき自分の体の中で何かが切れる音がした。

「ふざけるな！！！！」

その言葉とともに、俺はルルーシュの胸倉お掴む

「手伝って欲しくないだと、ならお前にとってあの子への愛情はそ
の程度なのか！！」

そう言った俺の声は自分の普段の声とは違う低い声だったが今の俺
には関係ない！

今はこいつを！！！！

「そんなわけない！」

「じゃあなんでお前は自分の妹が危険な目に合ってるかもしれない
のに、お前は自分のプライドを優先させるようなこといつてるんだ

！！血の繋がった兄弟、姉妹に対する思いの中に国の価値観なんてものは入らない！！日本もブリタニアも関係ない！！妹を助けたいなら自分のプライドも価値観もかなぐり捨てて助けようと努力しろ！！俺には妹と弟が居る！！お前が妹に対する以上の愛情は持つてゐる！！俺は二人を大切に思う兄として！！お前のさっきの発言は見過ごせない！！」

そこまで、一気にまくし立てると、ルルーシュの頬を思いつきりぶん殴る。

ルルーシュは啞然とした表情でこっちに顔を向ける。

そこに俺とは違う理由だが怒っているスザクが言う

「俺には兄弟なんて居ない！！けど、日本人もブリタニア人も関係ない俺が探したいから探すんだ！！枢木スザクは日本男児だ！！助けない人を助けるのに！！やりたいことをやるのに理由なんかいるもんか！！」

「探すぞ！！スザク！！」

「ああ！！」

「さて、ナナリーは僕が守るんだ！
だれの手も借りない大人の助けも日本人の助けも」「黙れ！！！！」
「」

「人の手も借りずに一人でやろうなんて思い上がるな！！」生意気なんだよ！！」

探し回っていると、以前、四人で作った秘密基地の近くだと気づいた。

だめもとで秘密基地の穴を覗くと

「ナナリー！！スザクこつちだ！！」

「見つけたか楽也！」

「ああ！ナナリー大丈夫か！？」

俺は必死にナナリーに呼びかけた。すると

「ううゝ・・・ん、ん？あれここは？」

「よかった！起きたのか」

「怪我は無いか？」

「え？この声、確かスザクさんと楽也さん？ はい体は大丈夫ですけど」

「覚えててくれたんだ、ナナリー」

「怪我はないみたいだな、ところで何でここにいるんだ？」

「ここに落ちてきを失ったみたいです。あの、ここはナンですか？」

「ここは、俺達＋二人の秘密基地なんだ」

「四人で作って、非常食や武器もあるんだ。」

「そうなんですか！すごいです！」

ナナリーは無邪気に笑った。その笑顔に俺とスザクは緊張の糸が切れてその場に座った。

そこから始まるのは、なんてことはない子供同士の遊びだ、他愛もない話をしたり、日本の遊びでナナリーができるものを行ったりした。

そうしている内に、誰からともなく、笑い始めて、三人で笑っている所にルルーシュが来た。

そのルルーシュの顔には、安心となぜか驚きがあった。

「ナナリー、さっき笑ってた？」

「え！ええ」

「どうして、ずっと笑わなかったのに」

「だって、スザクさんと、楽也さんが、笑うから」

「え！」

「三人で遊んでいる内に二人が笑って言って、それにっられてしまっ
つて」

「笑う・・・」

「気づいてなかったのか？」

「ルルーシュ。お前、全然笑ってなかったぞ」

そう、ルルーシュが笑ってるところを、俺達はまだ見たことがない。

「！！（笑わなくなってたのは、ナナリーだけじゃない、僕も・・・
負けた、ナナリーを見つけることもできずに、笑わせることもでき
なかった・・・。。。。。。そうだ！ナナリーを見つけてもらったん
だ、お礼言わなくちゃ、ありがとうって）」

「あ、「ルルーシュ！」」

スザクはルルーシュの言葉を遮った、そして

「ごめん！始めてあつた時お前を殴ったこと、だからごめん！」

俺も続けて言う

「！！なんでそんな簡単に、誤るんだよ」

「だって、お前すげーじゃん。ナナリーから話聞いたよ、お前のお
母さんのことも兄弟のことも、それなのに今までたった一人で妹守
つててさ、知らなかったとはいえ俺、お前に無責任なこと言っちゃ
まってさ・・・」

スザクはそういつて泣きそうな、というか泣いてる顔を下げた、俺
も言わなきゃな

「ルルーシュ、俺は今まで、お前の境遇を勝手に、創造だけで判断
して判った気になっていた。

でもお前の話をナナリーから聞いて、周りが信用できない理由も
つと深いと知った。

だから、ごめん、俺の判断はお前にとってとても無粋なものだった、
だからごめん！」

そう言つて、俺は頭を下げた。

「二人共・・・」

「ぐすつ・ルルーシュ、お前もこっちは入れよ！」

「おい、引つ張るなよ！・・・・・・・・・・意外と広いんだな」

「ほらふた閉めて」

蓋がしまった。この秘密基地は、蓋を閉めると不思議と暖かい

「暖かいな」

「はい、とっても暖かいです！」

「俺の力作だぜ！」

「俺達の、だろ」

side: 楽也END

新たな友達（後書き）

主人公怒り爆発の回&仲直りの回

僕たちの日常

side・楽也

あれから、俺達はルルーシュ達と友達になった。

あの日の後日、楽奈と楽太にルルーシュ達を紹介した時に驚かれたが、

今ではナナリーと楽奈は同い年ということもあって、とても仲がいい。

もちろん、楽太も俺もスザクもルルーシュとは親友と呼べる間柄になった。

両親にも、このことを言った。いやな顔をされるかと思ったけど、そんなことはなかった、けどよくもないみたい。

そうそう、ナナリーとゲンブさんの政略結婚の話ははなくなった。

そのことについて、俺とスザクがルルーシュに何したのか尋ねたが、ヒミツといわれた。

最近、いつもの4人に加わり、6人でいつも遊ぶ。

遊んでいると、ルルーシュの体力のなさが改めて実感された、

鬼ごっこ（ナナリー休憩中）で鬼になると、最初は誰も捕まらなかったし、

木登り（ナナリー見学中）ルルーシュはつねにビリ

体力使わないかくれんぼでも、地の利で日本組みの勝利

などなど、運動系では、まるっきりだめだった。まあ、最近の鬼ごつこと、かくれんぼについてはルルーシュが頭を使って、勝率が、
頭脳組：体力組 \parallel 3：7 になっている。

逆に、頭を使うことに関しては、ルルーシュがダントツで、一番だった。

ルルーシュが、将棋をしてみたいと言ってきたとき、ルールを知らないスザクの代わりに、

相手したけど今のところ、勝ち星はない。

そして、また一日が始まり、みんなで集まって、どう遊ぶか決めたら

今日は土蔵の野中で人生ゲームをすることになった。人生ゲームといっても、

家を手に入れる、とかが無い単純な奴だ、1回休みとか、2進むとか、

「やったぜ、3だ！」

スザクが、声を張り上げた

「えーと、1、2、3つと、おっしゃ！もう3進だつてさ。1、2、3つと、ほらルルーシュの番だぞ、」

「わかった、・・・よし！6だ、1、2、3、4、5、6うわ！二回休み！」

「お兄様、休んじゃうんですか？」

「そうだよ、ナナリー、」

「残念だったな、ルルーシュ、運が無くて。じゃあ、次は俺だな、ほいっと・・・2か、

1、2、げ！ビリの人と、同じところまで下がる！..!ビリってルルーシュじゃん！しかも二回休みって・・・」

三位から一気にビリ。そしてルルーシュは五位から大分離されている。

「僕より運が無いな、君は」

ルルーシュの奴、ちよつとした優越感に浸りやがってー、お前も俺と同じところなんだぞ！
わかってるのか？

「楽也だつせー！」

うるさいぞ！スザク！

「次僕の番……」

俺達のやり取りをスルーして、ヒーロー人形をコマにしている楽太がサイコロを振った。

その目、は6。

「1、2、3、4、5、6、あ、1位の人に追いつくだって……」

……なんだ、この俺との差は……

「私、追いつかれちゃうんですか？」

ナナリーがそういつてくる。はつきり言えばナナリーは今までダントツで一位だった、一位とビリの差は全100マスの中で、56マス、普通ここまで差が付くか？……

「次は私の番だね！それ、……4か、1、2、3、4、1進むだって、次ナナリーちゃんの番！」

うん、楽奈は普通だね、普通に居てくれて、兄ちゃんはうれしいぞ。

「はい！それじゃあ、いきますね、それ」

そうして出た目は、1だ。だが

「ナナリーちゃん、上がりだよ！」

そう、ナナリーの居た場所は、アガリマスのひとつ前、つまり何を出しても上がりだった。

「ナナリーに1位は取られたけど、まだだ、まだ2位が・・・いや3位が残っている！」

ルルーシュがそういう、確かに2位はもう無理だな、

「ルルーシュと楽也の場所から俺を越せない、俺のアガリになるぜ」

ふっ、それは違うぞスザク。

「スザク、物事には、予期せぬアクシデントが付き物だ、絶対は無い！俺はスザクを越す！」

そこで待っている”兎と亀”の亀のように！」

「そうだ、覚悟しろよスザク、上がっているのは！上がられる覚悟のある奴だけだ！」

だから待っている亀のように！」

「いや！俺は鳥になる！！紅蓮天翔——————！！！」

なぜ知ってる！

「ふふふ、お兄様楽しそう。」

「お兄ちゃんも、意地張っちゃって、」「スザクもね……」

そうして、俺達6人は、笑い合い、語り合い、また次の遊びをする。それが、最近の日常、平穏が壊れる前の、かけがえの無い、とても・

・ ・ 大切な日常

今日の、ある晴れた、夏の日の、日付は

皇暦2010年7月10日、

ブリタニアの日本侵攻まで、

後、およそ一ヶ月

僕たちの日常2

side・楽也

「おかえりなさい、兄様」

「た、ただいま、ナナリー」

ナナリーは兄の帰宅にそう言う。普通だ。この声をかけられるのがルルーシュならな。

今、声をかけられているのはスザクだ。実兄のルルーシュはスザクにさつきから鋭い視線を送っている。

事の発端は楽奈とナナリーの言葉から始まった。

.....30分前.....

「今日は何して遊ぶ？」

俺は6人に向かってそう言う。

「すぐろく、おにごっこ、かくれんぼ、木登り、虫取り.....
最近こればかりだな。ほかの遊びしようぜ」

「僕も賛成だ、スザク、楽也、日本の遊びで何かないか？」

「はい！おままごとしようー！」

樂奈の案が上がるけど、おままごとは・・・

「えーやだよ、そんな女っぽい遊び」

スザクの反論、ルルーシュも少し眉を寄せている。

「だめ・・・ですか？」

ここでナナリーの上目使い！ 樂奈も混ざって二人分の罪悪感が俺達にのしかかる。

もはや男子陣に拒否という選択肢は消えた。

「じゃあ、クジで役を決めるぞ。順番に取ってくれ」

そして、冒頭に戻る。クジの決定により、ナナリーは妹役、スザクはその兄役である。

「た、ただいま、ナナリー」

テンパってるなスザク。それとルルーシュいい加減にらむのやめたらどうだ。

「おかえりスザク、ご飯はもう少し待ってね！後、洗濯物は出しておいてね」

楽奈一（母役）もノリノリだな。そんなに楽しいのか、おままごと
つて。

「わかった」

スザクは洗濯物を出すふりをして、楽奈はおもちゃの鍋に砂を入れて
てかき混ぜている。

「ただいま。ナナリー、楽奈」

ルルーシュ一（父親役）が帰ってきた。

スザクの名前を出さないのは、ワザとか？ワザとだな確実に。

「おかえりなさい。貴方 お風呂にする？ご飯にする？それとも、
わ・た・し？」

つぶー。ちよつとまで！！楽奈そんな言葉どこで覚えた！！お
兄ちゃんは許しませんよ！！

「なっ！！楽奈！前二つはともかく、最後のはなんだ！僕は選ばな
いぞ！絶対選んでなるものか！」

ほらルルーシュもテンパってるよ、もう！いったい誰が教えたんだ
！？

「そんなこと言うなんて酷い！！あれだけ私の体を弄んだのに！！
あれは嘘だったの！！」

何っ！！ルルーシュ貴様ーーーー。いやいやまてまて、落ち着け
coolになれ、笑顔だ。笑顔。

「ルルーシュちょっと話がある」

がしつとルルーシュの肩を掴む。きっと俺の顔には今、満面の笑み
があることだろう。

「楽也！？まてっ！落ち着け。これは余興なんだ。痛っ！楽也、肩
が、肩が！」

「余興だなんて！酷いわ！あなた！」

「楽奈も悪乗りするな！！」

「もうめちゃくちゃじゃないか・・・」スザク（兄）

「ふふふっ、でも楽しそうですよ兄様！」ナナリー（妹）

「ワンワン・・・」楽太一（ペットの犬）

その後しばらくしてから3人に止められた。

ちらみに楽奈にどこで、その言い方知ったのか聞くと、出所は家の
母親らしい。

母さん・・・年齢が二桁にいつてない娘に、なに教えてるんだよ・・・。

そもでもって落ち着いてから、T A K E 2

「おかえりなさい！あなた、お風呂にする？」「ご飯にする？」

「ただいま、楽奈。ご飯にしようかな」

「おかえり、父さん」

「おかえりなさい、お父様！」

「ただいま」

ルルーシュ的には、愚息と愛娘つてところか。ここでやっと俺の出番だな、

「それじゃあ、みんな席について」

「」「」「いただきます！」「」「」

ここで俺！参上！！

「おい！てめえら何楽しんでんだ。今月の支払いまだなんですけど
くくく早く払ってもらえませんかね」

やっと出番になった俺。役は・・・見ての通りの借金取りである。

「今月の支払いは済ませたじゃあないですか！-！」

「何言ってんの。昨日から利息が変わったんだよ。その分、取りに来たんだ」

「さて、借金取り『A』」

『A』！！俺名前ないの！！

「その金が家の者が借りた金とするのなら、まず、借りた金の金額、印鑑を押された正式な書類、借りた金額の何%が利息となるのか言ってもらおう！」

ちょーアドリブ入れんな！そんなものあるわけない！！おままごただぞ。

ルルーシュさっきの仕返し！仕返しなんだな！！

いいだろう、ならばこちらも役相応の対応しようではないか。

突っかったがいいが、自分の言い分を正論で論破され悔し紛れに殴りかかるチンピラのように。んっ？

何か忘れてないか、俺？

「そんなことどうでもいい！金出さないなら。借金の片にお宅の奥さんと娘さん、連れてくだけだ！」

俺はルルーシュを押しつけて楽奈とナナリーに近づこうとする。だがそれを遮って来る奴がいた

「二人には手出すな！」

スザクがいたの忘れてたー！てかもうここまでやって引けね・・・

「俺とやるのか？いいぜ表でろ！」

「ああ！二人の男が私たちを取り合っている！罪な女だわ、私達！」

樂奈が母さんに毒されていく、いやこれはすでに毒されたと、言っただけがいいのか。

「？どういうことですか？お父様」

「ナナリーはまだ知らなくていいよ」

結局、毎度同じくしばらく戦った後に樂奈に止められて、おままだと終了になった。

夏の約束

side・楽也

夕食後、俺と家族はリビングに集まっている、俺と楽奈、楽太以外の表情がいつもと違う。

両親と婆ちゃんが、何か思いつめた様な感じだ、何か・・・って、日本とブリタニアの問題しかないか。

俺は、おそらく言われるだろう前に先に問いかけた。

「ねえ、どうしたの？父さん、母さん、婆ちゃん何か変だよ？」

父さん達は顔を伏せたが、すぐに父さんが俺の目を見て言ってきた。

「楽也、それに楽太、楽奈も聞いてくれ。」

「なに？」「？・・・」

「家はここを引越すことになった。」

やっぱり、ここにいるのは危険だからだろう。ゲンブさんに注意でもされたのかな？

そう考えていると、楽奈が声を張り上げた。

「何で！そんなのやだよ！」「……」

楽奈と、後顔には出さないが、おそらく楽太も嫌がっている。それ

もそうだよな、俺だって、スザク達と離れるのは、嫌だ！ でも・・。

「ここに居るととても危険なんだ、それに危険が過ぎればまた戻って来れる、一時的なものだ。」

「それでも、やだよ！スザクさんやナナリーちゃんと別れるなんて！」「僕もやだよ……。」

「我俣を言っな！！これは、もう決まったことだ。変更は無い。」

そういうと、父さんは席を立ち、寝室へ行ってしまった。

「引越すのは一週間後よ。それまでに、お別れは済ませておきなさい」

母さんもそういつて、父さんの後に続いてしまった。それを見て、里奈は自分の部屋に行き、楽太もそれに続いていった。

俺には両方の気持ちが理解できる。父さん達は、俺達のために言ってくれているのがわかるし、楽奈と楽太の方も、友達と別れるのは俺だって辛い

「なあ、婆ちゃん？」

「なんだい？」

婆ちゃんは、穏やかに俺に返してくれる。

「俺には、両方の気持ちがわかるんだ。俺だって、妹と弟は大事だ、何が何でも守りたい、だけど、友達も大事なんだ、別れたくないっ

て思う。どうすればいいのかな？」

婆ちゃんはしばらく間を空けた後言った。

「目を閉じて、深呼吸して、心を穏やかにして、目を開けたとき、思いの強い方はとればいい。わたしや、楽也が自分で決めた選択なら、何も言わないよ。」

俺はそれから外に出て、川原の近くまで来た。そして、そこで目を閉じた。……

そこで俺は、大きく深呼吸し、それを数回繰り返した。

その後、目お閉じて心を穏やかにする、

こうしていると、水の音がよく聞こえる。6人でよく聞いた音だ。風で草木同士が擦れる

音も、夏の虫が鳴いている音も、……

頭に思い浮かぶのは、6人との思い出、俺達6人がいつまでも続くことを願った思い出。

今までのことを、思い出しては消し、思い出しては消し、そして最後に残ったのは……

そうか、これが俺の願いか。ごめん。スザク、ルルーシュ、ナナリ

！、

俺が出した、答え、それは楽奈と楽太、家族の安全だった。

部屋に帰ると、里奈と楽太はベッドに横になっていた、だが寝ているわけじゃないみたいだ。

「二人共起きてるか？」

「「・・・うん」・・・」

「引越し嫌か？」

「嫌だよ・・・」「・・・」

やっぱりそうだな。

「一時的な物だよ、またここに戻ってこれるさ。」

「でも、スザク達と合えないんだよ！」「あえないのやだ・・・」

「俺だって嫌さ、でも一生のお別れとかじゃないだろ。また会えるさ。」

「「本当？」・・・」

「ああ！」

俺は、嘘をついた、はつきり言って、会える確立などほとんど無い。ルルーシュ達もスザクもブリタニアの日本進攻をきっかけにして、ここを離れていく、その後のお互いの場は遠すぎる。確立は確かにあるが、会える確立が低い、そんなものを言っても嘘と同じだ。

「だから、今は我慢して、明日3人に、お別れを言いに行こう。」

楽奈と楽太は小さく頷いた。

……翌日……

翌日俺はスザク達に、引越しの話を話した。

「えー!!引越して、どういうことだよ!」

スザクはそういつて俺に詰め寄ってきた。ルルーシュは、何も言わない。こっち

の事情がわかったんだろう。ナナリーはすごく残念そうに、こちらを見ている。

「引越して言っても一時的なものさ、しばらくしたら、戻ってくるよ」

そこで黙っていたルルーシュが口を開いた。

「ブリタニカのことか?」

やっぱり、わかってるか。

「そうだよ、ここはブリタニアが狙っているサクラダイト採掘所が近いからな。」

「また、ブリタニアか!!」

スザクがそう履き捨てるように言って、はっとした様にルルーシュ達の方を見た

「ごめん！ルルーシュ達のことじゃなくって！」

「わかってるよ。それにブリタニアの悪口だったら好きに言っていよいよ、僕だってブリタニアのことは大嫌いだ！」

「楽奈ちゃん達と別れてしまっんですか」

「ごめんね。ナナリーちゃんでもまたきつと会えるから！」
「会える……」

「そういうことだし、それに引越しの準備あるから、俺達が遊べるのは、後5日間しかない、だからその5日間は、たくさん遊ぼうぜ！」

そつれから 俺達は遊んだ、とにかく遊んだ、今まで以上にいつもなら怒られる時間まで遊んだけど、親達も、事情を知っているから、多目に見てくれた。

……引越し当日……

スザク達が見送りに着てくれた。これで、おそらく6人で会うのは最後になるだろう。

父さんに許可を貰って、時間を貰った。

無言、みんな黙ってしまい何も言わない。けど、この空気が嫌いな奴がいるかなら大丈夫だろう。

すでにうずうずしてるのがわかる。

「頑張れよ！向こうに行っても、元気でな。」

やっぱり、こんなしけた最後は俺達じゃない！

「おう！スザクだって、俺達がいなくて泣くなよ」

「誰が泣くか！！」

「そうだな、スザクは時々涙もろいからな」

ルルーシュがニヤツと笑って言った。

「なんだと！！」

スザクがむきになってる。いつものことだが。

「ふふふ、皆さんお元気で！」

ナナリーは微笑みながら言った。

「ナナリーちゃんもね!」「ルルーシュとスザクも……」

「ああ、この体力バカに振り回されるだろうが、頑張るさ」

「ルルーシュが弱っちいんだろうが!まあとりあえず、楽太も元気でな!」

「おう!後、ルルーシュちょっといいか?」

「なんだ?」

「俺は楽奈と楽太を守る、だからお前は、」

「わかってる、僕はナナリーを守るよ、」

「おい、俺もナナリーを守るんだからな、」

「お兄様、スザクさん」「お兄ちゃん」……

「もちろん、スザクにも守ってもらうつもりさ、」

「……そろそろ、時間だな、じゃあ最後にまた会えるように、約束しようぜ!!」

確立は少ないが、また4人が会えることを願って。

俺達は6人で円を作るように指を繋ぎ、約束の言葉を口にする。

「「「「「指きりげんまん！嘘ついたら針千本飲ます！指切つた！」「」「」「」

再開を約束し笑い会った日から数日後、ブリタニアは日本に侵攻し、日本はエリア11、と名前を変えられた。

Side・樂也END

約束している場所より少し離れた木の上

side・牧宗吾

ん、とりあえず、これで幼少期の話は終わりですかね。

家族を取った主人公君は、一体これからどうなっていくのか・・・
ふふふふ。

原作キャラとも親友になっっていますし、7年後は、一体どうな話になることやら。

ハッピーエンド？ バッドエンド？

再開できるのか。それともただの一市民として死んでしまっ
て、不完全燃焼になるか。

どれにしろ、その時までは……

「暇ですね」

side・牧宗吾

夏の約束（後書き）

幼少期終了です。これから大分時間が進みます。

それぞれの思い（前書き）

閑話みたいなものです。

それぞれの思い

.....2015年8月.....

side・楽也

あの日、スザク達と別れてから数日後にブリタニアが日本に侵攻した。その結果、日本はサクラダイトの採掘源も、文化も、人権も、土地も、そして、名前を奪われた。

ブリタニアによって植民地になった日本は『エリア11』と名前を変えられた。

幸いにも、俺達の移り住んだ場所には、ブリタニアの攻撃の手はこなかった。

今はブリタニアの侵攻から、5年経った。

戦後1年間は、戦後の日本に多くのブリタニア人がやってきた。この町にも、ブリタニア人が、我が物顔で闊歩していて。俺達日本人は毎日ブリタニア人のご機嫌を取りながらの生活を送っている。

生活も人も変わった。

住んでいる所は京都よりそこそ離れた場所のゲットー。

家は前の家より狭いし古ぼけてる、けど今のご時世家があるだけでもいいほうだ。

父さんは農家ではなく戦争により破壊された地域の復興作業をして

俺もそれを手伝っている。

母さんも婆ちゃんも内職をいくつか、その手伝いを楽奈と楽太もしている。

俺は坊主頭ではなくなった。今は、ワックスで立たせたようにボサボサの髪型だ。

そして、何より、家族で笑い合うことが、わかりすぎるほどなくなった。

俺と父さんは、仕事を終えて帰路についていた、その途中、人だかりができていた所があった。

覗いてみると、そこには数人のブリタニア人とそのブリタニア人に必死に謝っている一人の日本人男性がいた。

周りの日本人に訳を聞くと、何でもあの日本人が、ブリタニアの悪口を言っているのをブリタニア人が聞いたらしい。

迂闊な人だと思う。ここは、確かにブリタニア人が住む租界からは離れてはいるが、

ブリタニア人が居ないわけじゃないのに、近くを見ると酒のビンが転がっている。

それもブリタニア人が飲むワインなんかじゃなく、日本酒だ。酔っておもわず言ってしまったんだろう。

「いくぞ、樂也」

「わかった」

助けることなんてできない、助けてしまったら今度は自分の番だ

、やっつけるなんてもってのほか、その翌日に仲間を引き連れて来て、袋にされるだけだ。

だから誰もが黙って見ている。しょうがない、お気の毒に、かわいそうに、そう思いながらも、何もしない。

俺と父さんが背を向けてすぐ後に、鈍器で殴ったような音と男性の悲鳴が聞こえた。

「「ただいま」」

「お帰り、お兄ちゃん！お父さん！」 「おかえり……」

「おかえりなさい、あなた、樂也」「お帰り」

母さんと、婆ちゃんの顔には安心感が伺える。心配してくれたんだろっ、

樂奈と樂太は変わらない、多くの日本人が生きる氣力を失う中、家の中では変わらない笑顔で迎えてくれる。

夜、俺達兄弟妹はみを寄せ合って寝ている。

俺は真ん中で両脇に楽奈と楽太だ、二人ともずっと俺に抱きついて眠っている。

以前にもこんなことはあったが、毎日ではなかった。

おそらく二人とも不安なんだろう。俺だって怖い、でも、怖がってばかり入られない、

俺は兄ちゃんだからな。お前達を守ってやる、絶対に死なせるもんか！

そういえば、ルルーシュ達とスザクは大丈夫だろうか？

アニメどうりなら生きているだろう、だがこれは現実で何が起こるかわからない、

最悪3人とも・・・やめやめ！不吉なこと考えるな！

生きててくれよ、3人共・・・・・・。

俺の視線は、自然と窓から見える夜空に向く。

同じ空の下に居るんだろうルルーシュ、スザク、ナナリー、俺は家族を守りきってみせる！だからまた会おう。あの日の約束を果たそう！

そこには依然居た場所より綺麗で沢山の星が見えていた。

S i d e・楽也END

S i d e・ルルーシュ

俺とナナリーは今、アッシュフォード学園にいる。5年前、戦後の夕焼けの仲で

ブリタニアをぶっ壊す、と誓いスザクと別れた後に保護され、今、俺はルルーシュ・ランペルージ、ナナリーはナナリー・ランペルージと名乗っている。この学園に来て正直よかった。

アッシュフォード家は、俺達のことを、自分達の地位のための保険と考えているだろうが、ここに来れたおかげ、ナナリーの笑顔を失くさずにいられた。

来た当初は笑顔が無かったナナリーは今では学友にも恵まれ、よい学園生活をおくれている。

俺自身も、最初は笑顔が無かったが、今ではナナリーの前では嘘偽りなく笑えていると思う。

昔、ナナリーが居なくなつた時の教訓だな、あれがなければ、おそらく今でも俺とナナリーは笑っていなかった。

「お兄様」

咲世子さんに連れられたナナリーが来た。

「なんだい。ナナリー？」

話を聞くと、咲世子さんに日本の遊びについて教えてもらってらしい。

「・・・それで重ねた円筒を気の槌で倒さずに打ち抜いていく遊びなんです！」

日本の遊び、よくあいつらに教えてもらったな、スザクはおそらく無事だろうが、

楽也達はわからない、無事で居るといいんだが、あいつの引越した先では直接的な戦争被害がなかったはずだが、百聞は一見にしかずという言葉もあるが。

自分で見ないことには確信できない。・・・

「・・・兄・さ・・・」

・ 楽也の妹と弟である楽奈と楽太も妹を持つ兄として心配だ、・・・

「お兄様！」

！！考えに没頭していたようだ。

「な、なんだい？」

「先ほどから、呼んでましたよ？」

「なんでもないよ、ナナリー」

「いえ、お兄様のその顔は、スザクさんや樂也さんを考えている顔です」

「！！ふゝ、観念するよ、その通りだ」

「彼らを心配してるのはお兄様だけじゃないんですよ」

「ごめん、ナナリー」

「皆さん、無事でしょうか？」

ナナリーが落ち込んだように言う。

「わからない、スザクは生きているとは思う。京都六家あたりに保護されているだろう。」

だが樂也達は、まったくわからない、名誉ブリタリア人になっているか、それともどこかのゲッターにいるか、いづれにしても確信が持てないからわからない」

「あの時の約束、早く果たせるといいですよね」

約束、神崎家の引越す時にした 6人の再会を約束した誓い。

「そうだね、ナナリー、破ってしまうと針を千本飲まなければいけないからね」

そんな冗談を言って俺はナナリーに笑いかける。

ナナリーが寝付いてから、自分の部屋に戻り、窓から外を見る。

そこに見えるのは、アッシュフォード学園の敷地と夜の空、その空を見上げながら思い浮かべるのは、

あの暑い夏の日の思い出、俺達6人がまだ子供で居られた時間、スザク達と友達となり、

山で、池で、そしてあの土蔵で遊んだ記憶、

ブリタニアに捨てられた俺とナナリーがやっと手に入れた小さくだが幸せな世界、

だが、それすらも奪われた、ブリタニアに！だから！

「俺は再度誓おう」

ナナリーの目と足を奪い、俺達を捨て、スザクと楽也、楽奈、楽太との、俺達がたどり着いた小さい世界をも奪い、今も生命を脅かすあの国を！絶！対！に！ぶっ壊す！

見上げた空には、星も月も見えず、ただ漆黒の夜空があるだけだった。

S i d e : ル ル シ ュ E N D

S i d e : ス ザ ク

僕は今、軍に在籍している。ルルーシュと別れて総司令部に向かった、そこで数年過ごした後、僕は名誉ブリタニア人になり、軍に入った。

ブリタニア人からも名誉でない日本人からも、罵られるが、・・・僕にはそれがお似合いだ。

父親は殺して、自分の行動で、死ななくてもいい人も死なせてしまった僕には。

ルルーシュ、ナナリー、楽也、楽奈、楽太、君たちは今の俺を見たらなんていうだろうか。

僕がしてしまったことを、知ったらなんていうだろうか。

それに、楽也達は無事なのか。僕のしたことのでいで死んでしまっていたら・・・

ルルーシュはおそらく無事だ。今はアッシュフォードに居るはず。

だが、楽也達はわからない。同じ名誉ブリタニア人に聞いてみたり、休みの日には自分の足で探したりしたけど手がかりは無かった。

楽也、君達は一切今どこに居るんだ？生きているのか？それとも・・・死んでしまっていたら僕は君にどう謝ればいい？

出撃の時間だ、今は任務に集中しよう。

《準備はいいか！猿ども！今回の任務は、総督の足元でうるちよろする鼠退治だ！猿が鼠に負けるんじゃないぞ！》

「Yes , My Lord」

そういつて、空になど目もくれず、出撃する。

その空は、延々と続くドス黒い雲で覆われていた。

side : スザクEND

共に過ごした者達は、それぞれの道を進む、希望を持つ者、復讐を誓う者、千悔するもの。

これより、数年のときを経て、植民地である日本にとって、希望となるものが現れる。

その名は“ゼロ”。

そのものは、クロヴィス・ラ・ブリタニアを殺害し

その後、黒の騎士団を設立。数々の成果を挙げ、行政特区日本の会場で日本人を虐殺したユーフェミア・

リ・ブリタニアを殺し、合衆国日本の、設立を宣言

後にブラックリベリオンと呼ばれる事件を引き起こす。

ブラックリベリオンで、ゼロはユーフェミア皇女の元騎士である枢木スザクによって捕縛され、その後、処刑されたと発表された。黒の騎士団幹部も捕縛され、この事件は収拾されていた。

再会

side・樂也

6人で再開を誓ってからもう7年になる。俺は、ルルーシュに協力することも、スザクに協力することもしなかった。

俺は引越しの前に、家族を守ると決めたんだ。友達よりも家族を取った。謝りはしないし後悔もしていない。

この7年間、俺の持っているナイトメアを使う場面はなかった。

だがギアスの方は、何回も使った。家族がブリタニア人のいざこざに巻き込まれた時、

里奈や樂太と逸れた時、家族に危険を及ぼそうとした奴を叩きのめす時などなど、

家族のことを、ギアスを使って助けたりする時は、心苦しいが気絶させた。

危険な奴を叩きのめす時は、高速でぶん殴った。いずれも人の目に付かないように細心の注意を払ってやった。

ゼロ、おそらくルルーシュによる反逆、ブラックリベリオンが終わったのが一年前、

日本人の生活はさらに厳しくなった。ブリタニアの政策による圧政、ブリタニア人による暴力、罵倒、俺がギアスを使う回数も自然と増

えた。

俺達家族にも変化があった。

それは家族を養うために、名誉ブリタニア人になろう、という父さんの意見から始まり俺もそれに賛同した。そして俺と父さんは試験を受けて名誉ブリタニア人になった。

名誉ブリタニア人になってからは、俺達は確かに以前よりはましな生活が出来ているが、

はつきり言って、ましてただだ、ブリタニア人から毎日のように罵倒されて、

理不尽に物を言われる。もう何回意味もなく謝ったかもわからない。ゲットーに帰れば日本人にも白い目で見られる。語り合えるのは同じ名誉ブリタニア人とその家族とだけだ。

楽太は忙しい俺の代わりかどうかはわからないが、腕っ節は強くなつた。

俺が租界に言っているときは家族を守ってくれている。

女性陣は、あまり変わっていない。俺や父さんや楽太が帰ってくる、いつも笑って迎えてくれる。

今はたまらなくそれがうれしい。

その生活を送っている中で今、俺は仕事の休憩時間に租界のビルに映し出された映像を見ている。

移っているのは、黒のマントを纏い、同じく黒のフルフェイス型の仮面をした人その名は、ゼロ。

原作でいう第二期が始まった。

俺は放送の後に、いつも通り仕事を終わらせて、家に帰った。

「お帰り！楽也」

家に帰るといつもより少し、明るく母さん達がお帰りと言ってきた。どうしたのか聞いてみると、昼間あった放送のことらしい。

俺の家族は、楽奈と楽太以外スザクのこと少なからず思っているが、それでもセロの方に希望を寄せている。自分達の希望が帰ってきたんだからうれしいだろう。

それに対して楽奈と楽太は複雑な気持ちみたいだな。ゼロを捕まえたのはスザクだ、俺達にとっては幼馴染であり親友。スザクがラウンズに昇格したことも喜んでいたが、ゼロがいなくなったことも残念がっていた。

「兄ちゃん、あのゼロ本物だと思う？……」

「さあな、本物であって欲しいと思う。だけどゼロは仮面を被っているからな、そもそも本物かどうかなんて、側近の人ぐらいしかわかりはしないさ」

おそらく、その内、ブリタニア本国からスザクが来るだろう。ルル―シュかどうかは知らないがゼロが現れたとなれば、あいつが来ないはずがない。自分の主君をゼロに殺されたあいつが。

S i d e · 樂也 E N D

數日後

Side: 樂也

ゼロ復活宣言から日本全体が慌しくなった。

その数日後、黒の騎士団はゼロの作戦により救出され、日本人はゼロと黒の騎士団の復活を喜び、ブリタニア人はゼロが本物かどうか考察し、ブリタニア軍人は軍備を強化して、ゼロと黒の騎士団を警戒している。

そんなある日、俺はいつも通りに仕事を終え、帰ろうとした時に後ろから呼び止められた。

振り向くとそこにはつい先日もテレビに映っていた幼馴染が変装して立っていた。

「久しぶりだね」

「スザク・」

俺達はそれから、人がいない租界やゲットーが見渡せる場所へと移動した。

「7年ぶりだね、樂也」

「お久しぶりですね。 枢木卿」

一応、階級でいえば俺にとって雲の上の存在なので、敬語を使う。

「そんな、堅苦しい言い方しないでもいいよ」

どうやら、この話方はお気に召さないらしい。 そりゃそうだ、俺だって嫌だしな。

「じゃあ、改めて、久しぶりだな、スザク。 だがどうして俺の場所がわかったんだ？」

「僕がまだ名誉ブリタニア人だった頃からずっと探してたんだ。 樂也は数ヶ月前に名誉ブリタニア人になっただろう。 其のリストを見ていて見つけたんだ。」

「なるほど、名誉ブリタニア人はゲッターの人と違い、ある程度自由も権利もある。」

その仲には当然戸籍もある。 それを見たのか。

だけど、よく来れたな、ここはトウキョウ租界からは結構遠いゲッ
トーなんだが、

まあ態々会いに来てくれたのはうれしいけどな。

「楽也は今まで何があつたんだい？」

そついわれて俺は自分がこれまでのことを話す。引越してから、
何があつたか、

名誉になった理由とか、当然、ギアスやナイトメアのことは伏せて

「そうか、そつちも大変だつたんだね。」

「お前はどつだつたんだ？今まで何があつた？」

俺も知りたい。お前が今までどうやって生きてきたかを。

「僕は……」

「……だつたよ、そして今はラウンズにまで上り詰めた。」

スザクの話が終わった。

スザクはゲンブさんのことは言わず軍に入ってから話した。そして
ゼロのことになると人が変わったように憎しみを込めて言っていた。
まあ当然か

「そうか。」

俺には言える言葉が見つからない。『大変だったな』？『辛かったな』？いえるわけがない。

俺にはユーフェミア皇女を助けることはできた、だがしなかった。

俺はもう家族を守ると決めたから、そんな俺に皇女殿下のことを悲しそくに、悔しそくにいったスザクに言える言葉はない。いってどうする？

「楽太と楽奈は、元気かい？」

「元気元気、あいつらの笑顔は昔と変わらないよ。ただ、楽太は腕っ節が強くなったな！」

俺と同じで家族を守るって頑張ってる」

「家族を守る・・・か」

スザクはそう言って顔を伏せた。

「家族っていえば、ルルーシュとナナリーはどこで何してるか知らないか？」

「！！・・・ナナリーは、一年前までいた学園を出て今本国に戻ってる、皇族にも復帰して、何日かすれば日本の新しい総督に就任するんだ。ルルーシュは皇帝の命令で今もその学園にいるんだ。」

スザクはそう言った。それにしても、随分表情を隠すのがうまくなったな。

真実を知らなければ騙されてたぞ。

「ナナリーが！そうか戻ったんだな。それにしても見つかったまっ

たんだな。ルルーシュとナナリーは離れ離れか……。でもナナリーが総督か、今までの奴よりはマシになるだろうが、大丈夫なのか、目が不自由なナナリーに政務が出来るとは思わないが」

「僕が補佐をするよ。心配ない。」

「そう言うが、お前がいない時はどうするんだ。」

「お目付け役の人がいるから。」

確かお目付け役のローマイアは差別意識が強い奴だったその人とナナリーじゃ、うまく出来ないと思うが。

「それに同じ日本にいるけど二人が会うのは、きっとだめなんだろう?。」

「そうだね、一応僕だけが、二人に会えるけど」

そうか、そう言って俺はルルーシュ達の話をそこまでにして次の話に行く

「なあ、スザクってゼロを捕まえたんだよな?。」

「あ、ああ」

「今のゼロって偽者か? 確か処刑されたっていったし」

「・・・それは、わからないよ、でも確かなのはゼロを捕まえて、僕は今の地位に着いた。それだけさ」

「なあ、スザクに頼みごとがあるんだ」

「なんだい？」

「俺にだけ内緒でゼロの正体、教えてくれない？」

俺は冗談交じりにおちゃらけて言う。スザクは困ったように言ってきた

「知っちゃうと、楽也を捕まえなくちゃなくなるよ」

「おゝ怖い怖い。ならいいや、今のな什てことで」

「そうれがいいよ」

スザクは笑いながら言った。その時、
ピピピッ

携帯がなった、スザクのだ。俺達名誉ブリタニア人は持つことを許可されていないからな。

「つと、ゴメンちよつと……なんだ？、……わかつた」

「楽也悪いけど、」

「わかつてる、仕事だろ、頑張つてこいよ！」

「ありがとう。楽也。久しぶりに会えてよかった」

「俺もだ。今度は6人で集まるといいな！」

「そう……だね、それじゃ」

そついつてスザクは駆けていく、最後の言葉言った時、何ともいえ

ないような顔だったな
願望、後悔、怒り、悲しみ、いろいろ混ざってた。

「さて、俺も帰るかな」

里奈と楽太にスザクと会ったこと言ってみるか。きっと驚くな！
よし！ なら、さっと帰りますか！

S i d e ・ 楽也 E N D

S i d e ・ スザク

僕は帰りのへりの中で考える。思うことはさっき楽也が言ったことだ。

『今度は6人で集まるといいな！』

その言葉を聞いた時、僕ははっきりと答えを返せなかった。

確かに、確立は少ないが会うことは出来るかもしれない。だけど昔みたいな気持ちで会うのはもう無理だろう。

僕はゼロを捕まえて皇帝に差し出した。ゼロだったルルーシュを。

僕はルルーシュが許せないユフィにギアスを使って殺したあいつを。もうすでに僕とルルーシュとの間に友情はない。僕がアッシュフォードに行ってまだ少ししか立ってないが、おそらくルルーシュは記

憶が戻っている。

今の僕たちにあるのは、ただの友達ごっこ。ルルーシュはボ口を出さないように演技し、僕はルルーシュにボ口を出させようと演技する。

楽也、僕は君がうらやましい。昔のままで入れる君が。

S i d e : ス ザ ケ E N D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7471q/>

トリップ・ライター

2011年10月8日17時45分発行